

# 1. 口腔外科領域において，出血のため緊急に全身管理を要した症例の検討(第6回北海道臨床歯科麻酔研究会プログラム)

著者名(日)	中村 光宏，飯田 彰，木村 幸文，熊谷 倫恵，川田 達，谷脇 明宏，北川 栄二，亀倉 更人，藤沢 俊明，福島 和昭
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	10
号	2
ページ	130
発行年	1991-12-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00007682/">http://id.nii.ac.jp/1145/00007682/</a>

## 第6回北海道臨床歯科麻酔研究会プログラム

日時：平成3年6月22日（土）午後3時～午後6時

場所：きょうさいサロン 札幌市中央区北4条西1丁目 共済ビル

### 1. 口腔外科領域において、出血のため緊急に 全身管理を要した症例の検討

中村光宏，飯田 彰，木村幸文  
熊谷倫恵，川田 達，谷脇明宏  
北川栄二，亀倉更人，藤沢俊明  
福島和昭

（北海道大学歯学部附属病院歯科麻酔科）

頸部や顎顔面の血流は、総頸動脈の分枝に支配されており、動脈への腫瘍細胞の浸潤や機械的損傷などにより、突然に大出血することがある。口腔内からの出血では、出血の部位と気道が一致しており、気道閉塞の危険性があるため、気道確保と止血処置が平行して迅速に行われなくてはならない。更に出血の部位を特定することが難しく、ガーゼによる盲目的なタイオーバーや、外頸動脈、更に総頸動脈を結紮して、止血を図ることもある。特に、後者は、脳梗塞となり片側麻痺や時には死亡することになる。

突然の出血では、正確な出血量が不明なため、適切な輸血量や輸液量を決めにくく、循環動態や血液検査などを参考にせざるを得ない。また、止血操作の初期では、

輸血用血液の確保や諸検査に時間を要するため、代用血漿剤や昇圧剤の使用を余儀なくされる。

一方、患者は、腫瘍のコントロールができていなかったり、腫瘍摘出術が施行されている場合が多い。特に後者は、手術後の肝機能低下、嚥下性肺炎や貧血などを合併していたり、また、出血性ショックに陥っている事もあり、止血処置の全身管理をどの様に行うか総合的な判断が必要とされる。

今回、私達は、北海道大学歯学部附属病院において、1981年1月から1991年4月までに、9回の緊急止血処置を依頼されたので、患者の背景因子、止血処置の概要および全身管理の問題点などについて検討を加え、若干の知見を得たので報告する。

### 2. 当科外来における高齢者患者管理の実態について

亀倉更人，飯田 彰，木村幸文  
熊谷倫恵，中村光宏，北川栄二  
藤沢俊明，福島和昭

（北海道大学歯学部附属病院歯科麻酔科）

近年、医療技術の進歩や社会環境の向上により、人口の高齢化が進んでいる。これに伴い、様々な全身的合併症を有する高齢者の歯科外来受診も増加していくと考えられる。

当科は昭和61年4月に新設され、それ以前は口腔外科麻酔班にて行われてきた外来患者の管理をより積極的にやっている。そこで昭和61年4月から平成3年3月までの5年間の当科外来における65歳以上の高齢者患者につ

いて、検討を加えた。

まず、当科初診患者の内訳をみると、5年間の外来新患者は1202名であり、このうち65歳以上の高齢者は186名であった。この中で受診が途絶えるなどにより十分な病歴を聴取し得なかった7名を除く179名を対象とし検討した。全身的合併症については、循環器疾患の合併患者が多かった。すなわち、合併症を有さない患者は24名、循環器疾患以外の合併症を有する患者は27名であり、残